

第一章 「海洋文化拠点が清水、海洋分野にもたらすものとは」

世界に開かれた清水港・日の出地区から
海と人との関りを総合的に発信する「オーシャンフロンティア」ミュージアム

1 国際海洋文化都市としてのブランド化

駿河湾を中心とした海洋文化・海洋研究の価値を結集することで、国際海洋文化都市のイメージ形成とシティブランディングを図る。

2 国際的な集客と賑わい創出

地球規模の海洋文化をテーマとしたエリアを形成し、クルーズや周辺施設と連携した国際的な集客を図り、広域での賑わいを創出する。



3 海洋分野を拓く研究・教育促進

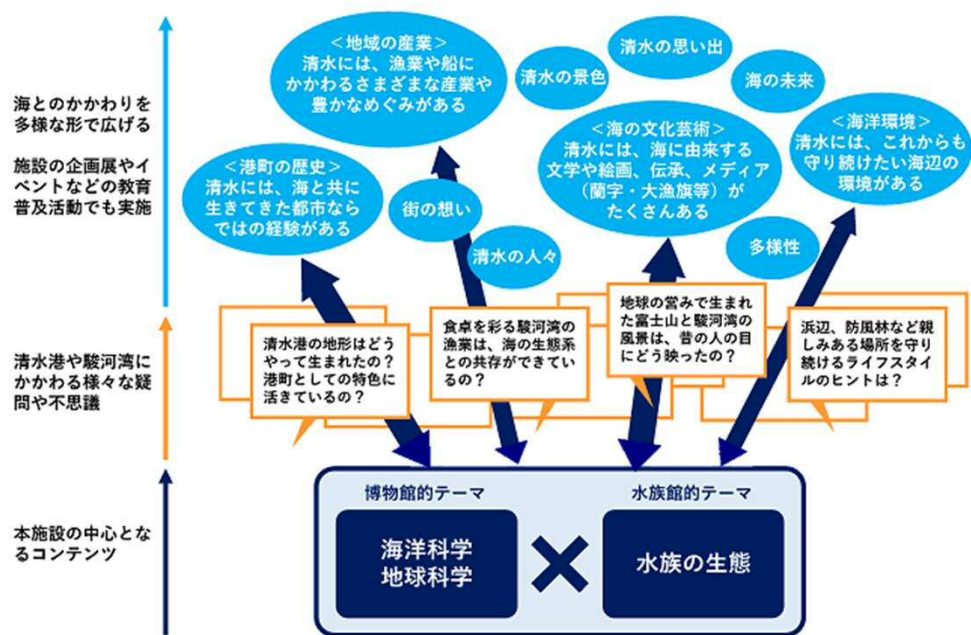
海洋分野で活躍できる人材育成基盤の形成を図り、静岡からグローバルに活躍できる人づくり、次世代層の育成を促進する。

4 海洋産業の振興と経済波及

海洋に関する産学交流を図る拠点を形成し、資源開発や防災、環境など未来を担う新産業創出につなげ、市域での波及効果を生み出す。

第二章 「世界初のテーマを持つ施設が提供する、多様な価値」

水族館や博物館といったこれまでのミュージアムの垣根を越えた
「海洋・地球の統合的理解」へ向けた、他に類を見ない新たな視点のミュージアムへ



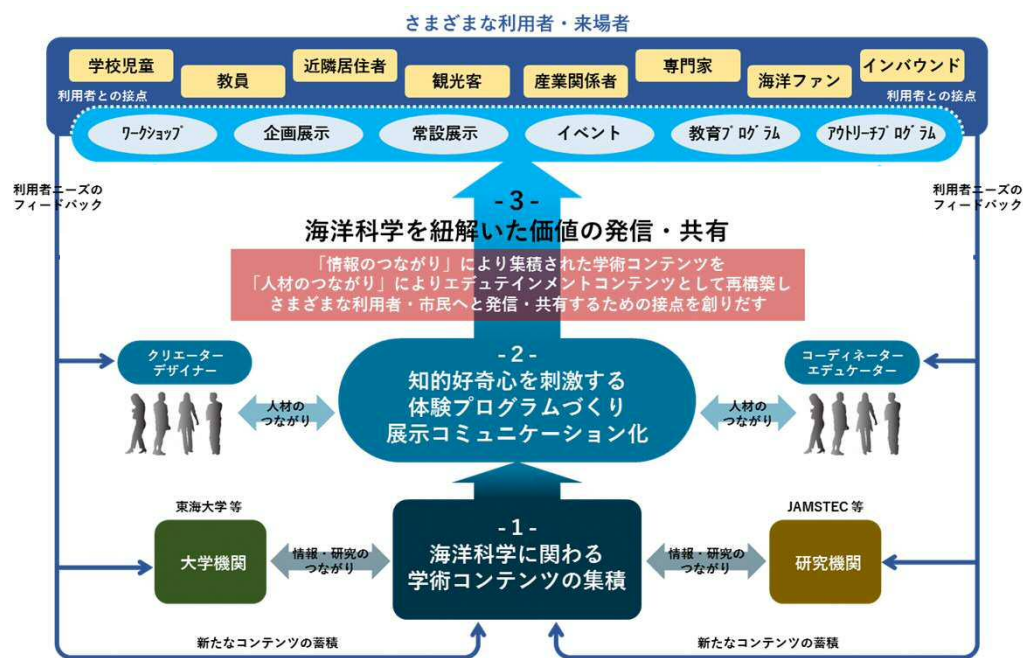
第三章 「多様な「つながり」が創るミュージアムの活動」

■施設の活動理念

海洋科学を中心とした「つながり」により
常に新鮮で魅力的な活動を創る

海洋・地球科学の学術的な「情報のつながり」をベースに
海洋・地球の未来を創る「人のつながり」の参画により
常に最先端の情報、鮮度の高い魅力的な活動へ

■海洋科学を中心とした「つながり」のイメージ



■「つながり」を創るための5つの活動



第四章 「海洋・地球を総合的に体感させるための展示」

■展示コンセプト

「わたしと海と地球」のつながりを実感する
そのきっかけは、「駿河湾」



■展開イメージ

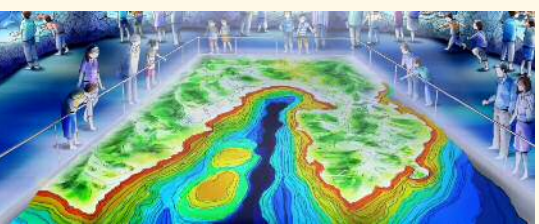
2 つながる海と地球

海洋・地球科学の多様な研究成果の相関、海・地球のつながりを実感させるために 研究分野にとらわれずに成果を一覧できる世界初、水族館/博物館のハイブリッド展示

HUBを中心に 駿河湾のフィールドを展開

HUB わたしたちと駿河湾

駿河湾の成り立ちや現在の様子を紹介 その特異性を直感的に伝える迫力ある演出



2-5 駿河湾で遊ぶ

駿河湾や深海をモチーフにしたワクワクの体験型展示空間で、親子で楽しく海の不思議を探求



2-1 駿河湾—陸水

駿河湾を支える陸水・生物のつながりと背景にある地質・植生などの様子を体感



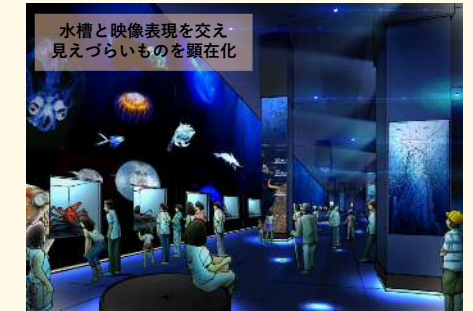
2-2 駿河湾—浅海

浅い海と人間活動との関わりや、地形の様子を大型水槽や参加型展示で伝える



2-3 駿河湾—深海

深海 海底の世界をイメージした空間で未知の海洋の不思議や、可能性を訴求



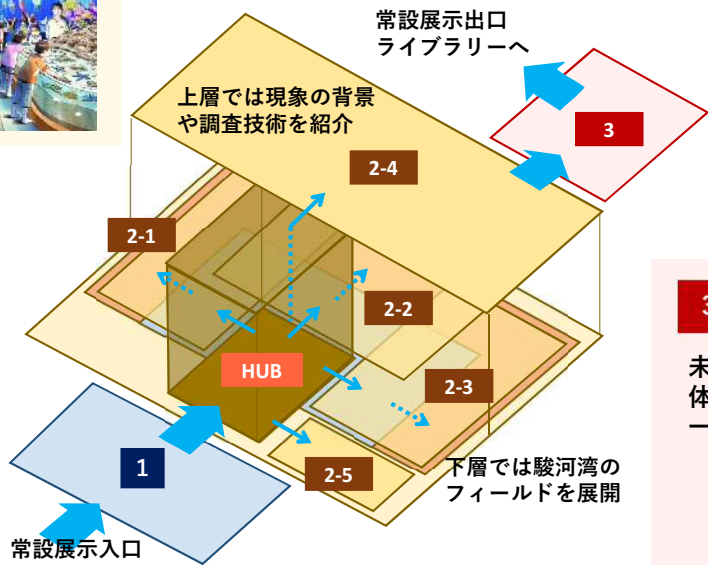
2-4 深海・地球を調査する

JAMSTECや東海大の最先端の海洋地球調査の内容やデータを多彩なメディアで表現 地球上で起こる様々な現象を紐解く科学体験や、コミュニケーターとの対話の場を設置



1 導入エントランス

海洋・地球のシステムを壮大なスケールで描く没入感のある導入演出



3 エピローグ (展示室出口)

未知に包まれた駿河湾のリアルな姿を体感し、研究者と共に更なる探求への一歩を踏み出す未来への道

駿河湾にまつわる数値をメディアアートで表現

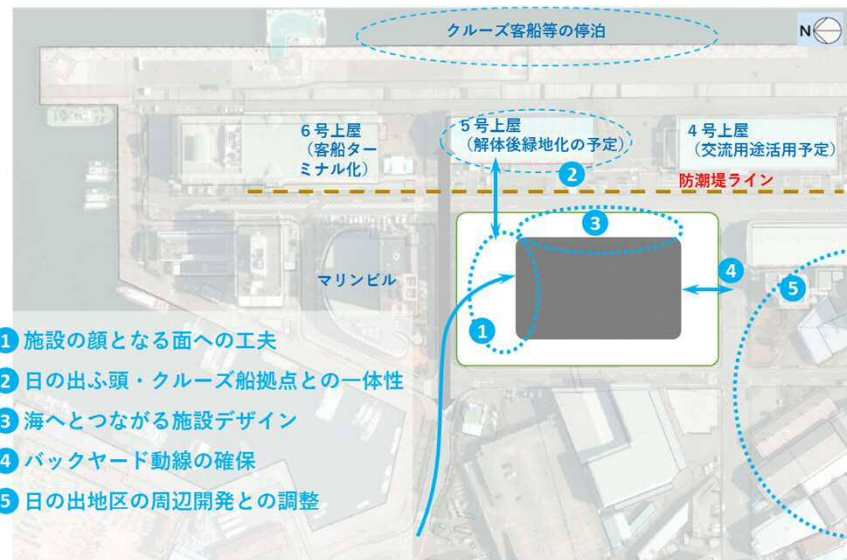


第五章 「海とつながる施設をめざして」

■施設の基本的な考え方

- (1) 周辺環境との調和・連携を生み出す
- (2) 清水ならではの景観を活かした特徴をつくる
- (3) 教育普及活動・常設展示を中心と
- (4) 利用者・運営者共に安全・快適に利用できる環境づくり
- (5) 環境にやさしく維持管理が容易な施設づくり

■施設設計に向けたポイント



■周辺環境を活かした展開イメージ

駿河湾を望む立地や、再整備が期待される周辺環境との連携を図り多様なターゲットに対して魅力的な展開をめざす



■機能構成のイメージ

展示機能を中心に、施設周囲の環境にも配慮することで、より効果的な諸室配置をめざします

展示機能 例) 常設展示室、特別展示室、特別シアターなど

基本的には有料であるため、仕切られた配置計画が必要。さらに展示の効果を向上するために教育普及・研究連携機能に係る諸室とのつながりへの配慮が求められる。

教育普及機能 例) ライブラリー、ワークショップルームなど

展示とは異なる面で利用者の自主的な活動を促進すると共に、施設での普及プログラムなどが開催可能な来場者に開かれた空間としての役割を持つ。

交流機能 例) ロビー、カフェ、ショップなど

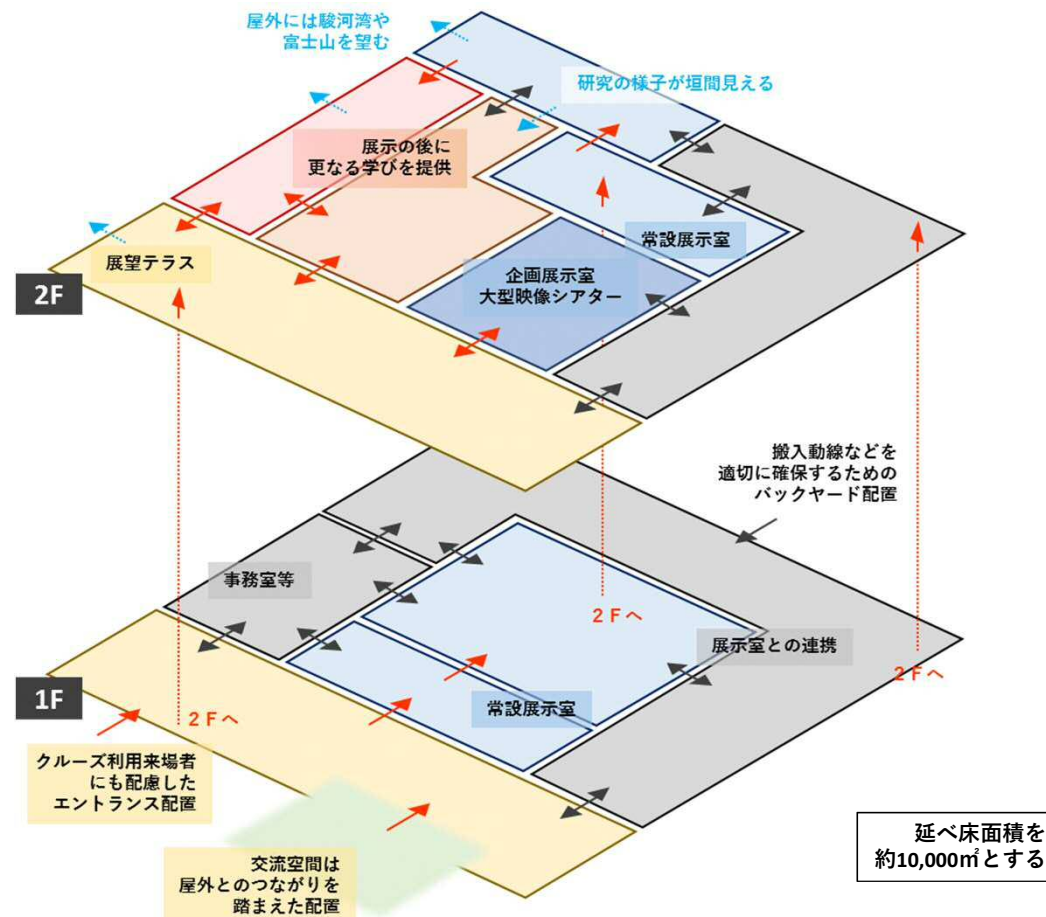
多様な利用者が自由に往来・交流することが可能であり諸室をつなぐ役割を持つ。時にはイベントやMICE対応など大空間を活用した展開も可能とする。

研究連携機能 例) 研究連携ラボ、プレゼンルームなど

研究者や連携先団体など専門家と施設職員の共創のための設備を備える。さらに来場者の方が研究連携の様子を見たり参加することのできるオープンな一面も有する。

事務管理機能 例) 事務室、関係者控室、バックヤードなど

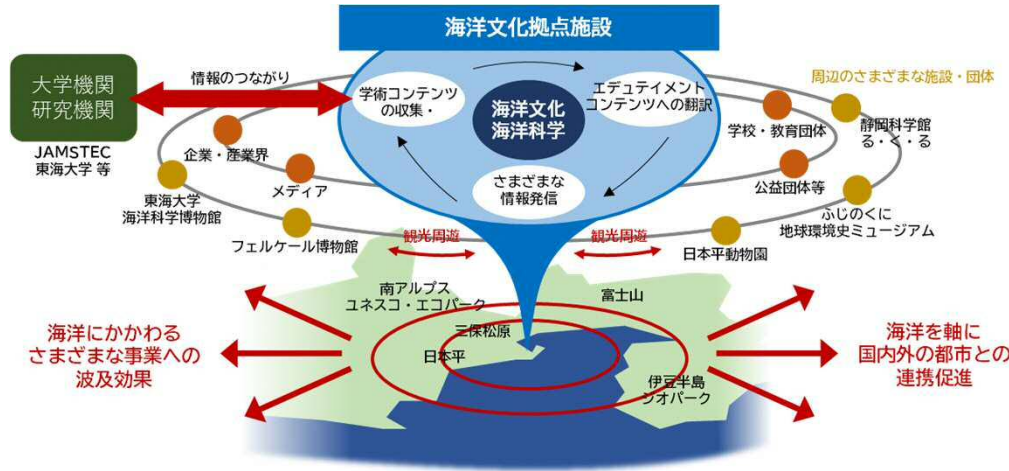
さまざまな施設活動を支援するための諸設備や職員の事務設備を備える。関係諸室とのつながりに配慮した配置計画が求められる。



第六章「魅力的・持続的な施設運営のために」

■清水港をフィールドにした施設の魅力的・持続的な運営をめざして

多彩な海洋文化へとつながる運営を行うために多様な団体・施設とコラボレーションし世界的な「海洋文化・海洋教育のメッカ」をめざします



■施設の質を高めるための事業づくりの考え方 — 事業手法

民間活力の導入を検討することで、施設・地域にもたらす効果が最大になると共に良質で持続的な施設運営が可能となる事業手法を選定します。

(1) 基本計画の実現性

- ・本基本計画における、目的や役割、各活動における考え方を、民間事業者等の創意工夫によってより良い形で実現できること。

(2) 事業継続性と公益性

- ・本事業が継続して実施される「事業継続性」及び、入館料をはじめとする、施設内外での多様な収入による、収益型事業を確保すること。
- ・施設活動を通じた海洋研究・教育との連携等の「公益性」を確保すること。
- ・「事業継続性」と「公益性」のバランスを調整し、官民双方にメリットがあること。
- ※公益的なサービスで事業継続性を確保するなど、展開の工夫も検討する

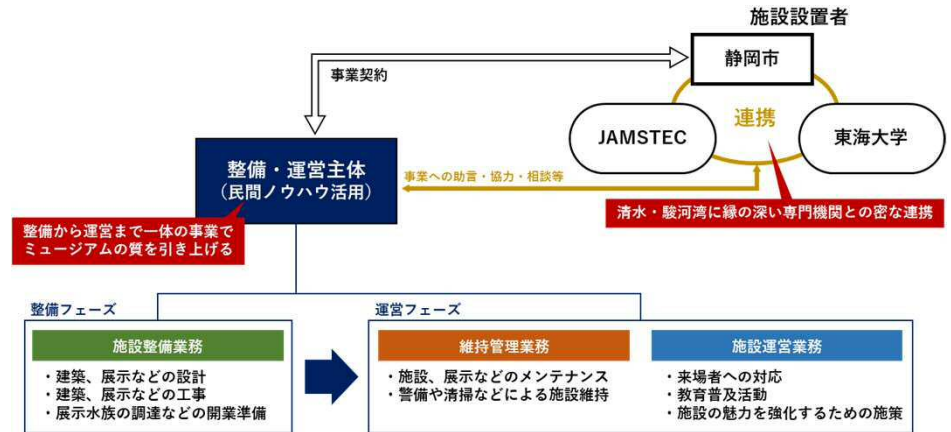
(3) 事業者の活動への自由度

- ・事業者が自らの創意工夫やノウハウを積極的・効果的に発揮しやすい環境を構築すること。
- ・事業者の発案が、迅速に現場での活動に展開可能な意思決定の環境を構築すること。
- ・ただし自由な環境においても、評価制度など監視可能なしくみを設け、良質で持続的な施設運営を確保すること。

海洋文化拠点施設は、入館料等、受益者による一定の負担が想定され、類似施設（水族館等）では民営の事例も見られる「文化施設」という性格をふまえ、民間活力とも連携した様々な官民連携事業手法（PPP＝パブリック・プライベート・パートナーシップ）による実現が考えられます。今後の検討においては、施設・地域にもたらす効果を最大にし、持続的な施設運営が可能な事業手法を選択していきます。

■質の高いミュージアムを構築するための事業の考え方 — 事業スキーム

施設の魅力や集客力をマネジメントする整備・運営主体と、学術的に質を高められる研究機関、それぞれの強みを引き出しあう事業スキームを構築することをめざしていきます



■施設の効果を高めるために本事業と併せて必要となる取り組み

施設の効果をより高めるため、本事業の外側においても、以下の各種取り組みを官民学の地域関係と連携することが必要となります。

